

新型コロナウイルスの影響で中止された全国高校野球選手権兵庫大会に代わる「夏季兵庫県大会」（神戸新聞社など後援）が18日、県内各地の球場で開催した。大会初日に登場した須磨友が丘高の女子部員、割鞘世奈さん（3年）は試合の補助員として仲間のプレーを見届けた。男子とともに白球を追い、コロナ禍では活動自粛の日々も経験。規定で女子は公式戦に出場できないが「一緒に試合に出ている感覚でした」と、笑顔で高校最後の舞台を終えた。（9面参照）

コロナ禍 高校野球「夏季県大会」開幕

仲間と全力最後の舞台

父や兄の影響で小学3年から野球を始めた。中学時代は女子の全国大会に出場し「やるなら上を目指したい」と、高校でも硬式野球部で男子と交じって切磋琢磨する道を選んだ。1年春には練習試合に出場して初打席で二塁打。「その時の感覚は今でも忘れられない」と笑みを浮かべる。

筋力トレーニングやランニングなど、男子と同じ練習メニューをこなしてきた。春以降の休校中も自宅や近くの公園で練習を欠かさず、刺激を受けた男子部員も割鞘さんの自宅を訪れて体を動かした。小川良樹主将（3年）は「野球に対する気持ちは、僕らの誰よりも強い」と話す。

日本高野連の規定で女子の公式戦出場は認められていない。割鞘さんは「全国高校女子硬

須磨友が丘高 出場かなわぬ女子部員

補助員務め「一緒に戦った」

式野球選手権に合同チーム「連合丹波」の一員で出場する予定だったが、同大会も今年はコロナ禍で中止が決まった。

自身にとって引退試合となった今月12日の練習試合。ヒットは打てなかったが、チームメイトは今まで以上に盛り上げてくれた。男子部員からの「お疲れ」の声が胸に刺さり、涙がこみ上がった。

18日の1回戦でチームは強豪の神戸国際大付高に敗れた。審判にボールを受け渡す補助員としてベンチ横で試合を見守った割鞘さんは「試合に出られない中でも、応援したり補助をしたり、いろんな支え方や関わり方があることを知った。この経験を今後に生かしたい」と、すがすがしい表情で球場を後にした。

（山本哲志、長江優咲）



補助員として審判にボールを手渡す須磨友が丘高の女子部員、割鞘世奈さん＝18日午後、神戸市須磨区、ほっともっとフィールド神戸（撮影・秋山亮太）